

I love you で「家庭訪問」

城原小学校 桐原 健司

1 家庭訪問・・・その前に

(1) 子どものみ方 つながり方

子どもを一人の人間として・・・しかし、子どもは子ども

真実は誰にもわからない・・・だからこそ事実を積み上げる

(2) 学校にいる間にできること

2 家庭訪問の目的

○どんな時に 何のために行っていますか。

「どんな時に」は思い出せるが、「何のために」が出ないのでは・・・

→「家に行つての指導」や「学校であつたことの報告」とは違う

→それらは話のネタにすぎない

→家族が何を思い、どのような現実に生きているのかを知るために足を運ぶ(自分の眼鏡を拭きに行く)

3 私の場合

いつ どのように どんなときに なんのために

○なおき・・・子どもの暮らしに迫る(子ども会に来てなかつたから)

○ぷっちょ・・・教師の思い込みを覆す(欠席したから)

○さりやとえりか・・・子どもと心をつなぐ(気になつたから)

○だいち・・・保護者と協働する(次の算数が心配なので保護者に協力してほしかつたから)

○ほだか・・・子どもの本音を拾い安心感をもたせる(学校では言うことを聞かないから)

○ゆうま・・・子どもに寄り添う(心配だつたから)

〈卒業後〉

○こうじろう・・・保護者に寄り添う(おばあちゃんとお母さんが困っているから)

○なおゆき・よしひろ・・・ともに過ごす(「荒れ」ていたから)

○せいや・・・進学を支える(高校に行かせたかつたから)

4 集団づくりと家庭訪問

教師が万能ではないのだから、言つてもいいことは伝えてつなぐ

あるできごと

今日の6時間目は5年1組だけで行う最後の水泳学習だったので、少し遊ばせようと輪と棒を沈めて、子ども達に拾わせるゲームをしていました。

気づくと、アヤカが泣いています。事情を聴くと、どこからか飛んできた棒が顔に当たったとのこと。

幸いに目立った外傷はありません。

私(担任)は「誰かが投げたに違いない」と思い、すぐに全員をプールサイドに上げました。

私は子ども達に事情を話し、誰か投げていた人はいないかと聞きましたが名乗り出る子どもはいません。

帰りの会の時間が迫っていたので、とりあえず体育を終え教室に帰らせました。

帰りの会の「先生の話」の時、改めて子ども達を問い詰めましたが何も明らかにはなりません。

【問】

- ① さて、この後担任であるあなたはどうしますか
- ② この出来事にはどんな展開になったでしょうか

【あなたの考え】

①

②

子ども丸ごと肯定宣言

— 同和教育との出会いを通して —

桐原 健司

はじめに

教師ならだれでもいう。授業づくりも、集団づくりも、学校づくりも、「主役は子ども」である。

学校というスクリーンに、一人ひとりの子どもたちを主役にしたドラマを、子どもたちの教だけ創り出す、映画監督のような役割を教師は担っている。

では私たち教師は、どれほど主役たる子どもたちの事実を、そして真実を知っているのだろうか。あるいは、知ろうとしているだろうか。主役のよさや持ち味を理解

していない監督に、いい映画は撮れないだろう。

私は、決してよい監督ではないが、子どもたちの事実や真実を知りたいという欲求だけは強くもっている。なぜなら、簡単には知ることができないからだ。その分、少しでも近づくことができた時、私の感情は大きく揺さぶられる。これまでの見方や価値観までも覆されるような衝撃に襲われる。そんな場面に出合った時、私は、教師として、人間として何度も生まれ変わることができたといつても過言ではない。そう考えると、「知りたい」という気持ち「が」なくなつたとき、私は教師でいる資格を失つたと自覚すべきであろう。

そう思うに至つたのは、間違ひなく、同和教育と出会い、そこにかかわる多くのひととの出会いがあつたからである。

「同僚性」の中で

教師として正式採用される前、講師として二年間ほど勤めることとなつたI小学校には、日々子どもや保護者と向き合い、個性的な教育実践を重ねている先輩教師が多数いた。しかも職員集団には一体感があり学校は明るい。今考えるとみんな若かつた。経験と実践をもとにした知恵袋的存在の五〇代とオン・オフ共に職員のリーダー的存在の四〇代が数名いる他には、バイタリテイ溢れる三〇代前半と二〇代ばかりだつた。子どもの荒れや校内暴力が社会問題として取りざたされていた一九八〇年代、福岡市にはそのような職員構成の小学校が多かつた。

教師集団が若かつたからなのか、この頃のI小学校では、それぞれの教師が、それぞれの持ち味で学級集団づくりや授業づくりに心血を注いでいた。例えば、綴り方を軸に子どもと向き合う教師がいれば、合奏や合唄とい

う活動を通して集団づくりを行う教師もいた。決して同じことはやつていなくてもI小学校の教職員には一体感があつた。「学級を開く」「教室を開く」ことの重要性がいわれて久しいが、すでにここでは開かれた学級経営が行われていたからに違ひない。そして、各クラスの子どものもとも保護者のことも、そして地域のことも、全職員で情報の共有ができていた。最近のフリースでいえば「同僚性」に満ちていた学校であつた。

具体的な例を挙げれば、次々に発行される各クラスの学級だよりは、毎朝、全職員の机の上に置かれる。そのおかげで、他の学級で起こつていることや担任の先生とそとのクラスの子どもたちとの「格闘」が、映像をみるように伝わってくる。同時に学級だよりは、集団づくりや授業づくりのネタがあふれている。お互いに参考にしながら、時には真似もしながら、結果として全員が高めあつたことにつながつていたのであつた。

子どもとの距離も近かつた。どの子どもも、自分の学級に所属意識をもちながらも、担任の枠を超えて、たくさん教師とのかわりを求めてくれていた。教師サイドのいい方をすれば、どの子も自分の学級の子どもによ

うな気がする学校だった。

同和教育との出会い

I小学校は校区に二つの被差別部落を有する学校である。職員室では「解放子ども会」「識字学級」「同和教育推進教員」「三〇人学級」「特別措置校」などなど、学校現場に勤めはじめたばかりの私には、耳慣れない言葉が飛び交っていた。福岡市内では、同和地区関係校の中でも特に先進的な実践校であったI小学校には、いくつもの誇るべき教育実践と財産があった。多くの地域教材の掘り起こしや自主教材の創造に取り組んできたこと。六カ年を見通した人権教育カリキュラムを作成し実践を重ねてきたこと。被差別部落はもちろん、被差別部落以外の地域にも積極的にいかかり、部落問題を啓発してきたこと。挙げればきりがながい、すべては「差別の現実を学んだ」結果としての取り組みであり、同和教育に社会性をもたせる上で、必要な取り組みであった。

実は、川を隔てて隣接する校区で育った私にとって、I小学校区は差別の対象としての地域であった。小学生

の頃から、橋を渡ってI校区に入る時は、何ともいえない緊張感があったことをはつきりと覚えている。いつ誰に何を教えられたのかはまったく思い出せないのに、差別意識だけはしっかりと私の中に根を張っていたのだ。

しかし、I小学校での講師経験は、私のその後の教師としてのあり方を決定付けた。

家庭訪問という手段

「靴減らしの同和教育」とは、単に家庭や地域を訪ね歩くことではない。まして、教師が一方的に報告や依頼をして回ることもない。教師自身も受けるすべての感覚を働かせて、子どものことや子どもを取り巻くすべての環境(ひと・もの・こと)から、より深い子どもの真実に迫る営みである。そして、それぞれの子どもの背景にある現実に触れ、私たちはそこで「差別の現実」に学ぶこととなる。

私は家庭訪問を大切にしてきた。毎日教室で顔を合わせていても、子どもを丸ごと受け止めるには限界がある。

学校を離れ地域や家庭に帰った子どもたちの姿に出会うたびに、思いもよらぬ現状を知ったり、思い違いに気づかされたりの繰り返しだった。また、子ども本人だけではなく、祖父母やきょうだいなど、本人を取り巻くさまざまな方々とも出会うことができた。

若い先生から、「家を訪ねる勇気がないのですが…」と相談されたことがある。私の答えは一言だけ。

「何かあった時にだけ行こうとするからだよ。」

私が家庭訪問をするのは、ただ子どものことをもっと知りたいからだ。保護者に注文や報告をしに行くわけではない。

とはいっても、はじめからそうだったわけではない。家庭訪問はやっているつもりでいたのだが、ある時「行きやすいところ」にしか行っていなかったことに気づいた。そこで、ある頃から仲間の実践に学び、欠席した子どもの家には寄って帰るようにした。なるほど、そうすると、定期的な家庭訪問以外でもほとんどの家に行くことができた。この家庭訪問が定着すると、欠席した子どもや保護者も「今日は先生が来る」と、手ぐすねを引いて待っていてくれるようになった。一軒寄れば、必ず近く



に別の子ども家もある。ついでにちよここと立ち寄ることもできる。顔を合わせて話をしていれば、何かと話は広がるものだ。特に話の内容を考えて行かなくても、「そうそう、そういえば最近…」という話になる。どうしても話題が見つからなければ、挨拶だけでも十分だろう。

子どもにとってのホームグラウンドに先生がやって来たという事自体に興味があると考えている。

子どもの事実を知るといふこと

(一) 家の中には生活の現実があふれている

「もしも自分が〇〇だったら…」という作文を書かせるど、多くの子どもたちが、「野球選手だったらホームラン王になってお金持ちになりたい」とか「お金持ちになってアールつきの家に住みたい」などといふことを書く。

三年生のN男はこう書いた。

ぼくが野球選手だったら、ホームランをいっぱい打つて、おばあちゃんにおかずを買ってあげたい。

N男は、祖母と兄の三人暮らし。父は仕事の都合でほとんど不在だった。優しく穏やかな性格で友だちからはとても好かれているが、毎朝遅刻し学力も厳しい。週に一回、夕方からはじまる解放子ども会にも時間通りには現れない。たびたび家を訪ねた。N男もおばあちゃん

ドリルで復習をしておくようお願いに行つた。母親は「私が教えられるはずないやんか。」と一言。そこで、玄関先でドリルを置いて母親相手に算数の授業。四苦八苦しながらも何とか理解してくれたようす。その後、親子でどれほど勉強をしてくれたのかは定かではないが、あまり勉強に熱心ではないと思つていた親子に突っ込みを入れることはできた。もしも電話で、「復習をよろしく」とお願いしていたら、きつところはならなかつたらう。一方的な教師目線の依頼になつていたに違いない。成果のほどはともかく、家の玄関の扉を開いたことで、子どものために算数の問題を必死でわかるうとする母親の姿に出会えた。

(二) 涙の意味を知りたくて

どうしても子どもの心の中が見えない時がある。

合唱の練習を行っているときのこと。

いつもは大きな声でみんなをリードするS子にやる気が見えない。おしゃべりもやめない。座っている時も足を投げ出し、目に余るほどだらけた状態だった。たまりかねた私はS子の近くに行つて、やや厳しい口調で注意

も、いつも愛想よく私を迎えてくれ、必ずお茶を出してくれた。

ある時、いつものように定刻になつても解放子ども会に姿を見せないN男を迎えに行つた。冬の夕暮れ時、古い農家の部屋の中は灯りもなくひっそりとしていた。中をのぞいてみると、N男は一人コタツに入つて転寝をしていた。私は黙つてコタツにお邪魔した。しばらくすると私の気配に気づいたN男が目を覚ました。寝ぼけた顔でコタツを出ると、お茶と皿に盛つた数枚のたくわんを私に差し出した。胸がしめつけられた。四半世紀の時が過ぎた今でも、その場面は冬の空気や臭いとともに鮮明に思い出される。

「おばあちゃんがおつたら、いつも何か出してくれるやろ。」そういいながら、N男はシャムパーを羽織つた。何度も訪ねたN男の家に時計がないことに気づいたのはこの時だった。

(三) 電話より家庭訪問

算数の苦手なD男に、次の單元は少し厳しいかもしれないので、今回はかりは保護者の力を借りよう、計算

した。その時間、S子はふてくされた表情で下を向いたまま練習を終えた。私は、おしゃべりをしてたことやダラけていたことよりも、注意された後のS子の態度が問題だと思つた。

S子に同調した態度で練習時間を過ぎたE子と二人を、放課後の教室に残した。

「今日はどうしたと？ いつもでもあんな態度とつて、あなたたちらしくないよ。」

「……」

「先生は、怒つた後いつもでもクズクズ言わんやろ。注意したら、すぐにいつもの先生に戻るやろ。」

「うん……」

「ゴメンつてニコツとしてくれればそれでいいのに、いつもでもあんなふてくされた態度を続けることが許せんぞ。それに、歌の練習のときはあなたたちが頼りなんやけん、頼むよ……」

というようなことを、極力穏やかに話した。途中、思いがけずS子の目から大粒の涙が落ちた。

「今日はちよつと先生の言い方もきつかつたかもしれん。そこはごめん。じゃあ、また明日。気をつけて帰りによ。」

さよなら。」

二人は返事もせず教室を後にした。

後味が悪かった。気になって仕方なかった。二人の反応がつかめなかったこと、S子の涙の意味がわからなかったからだ。

職員室を飛び出してS子の家に向かったが家にはだれもいなかった。次にE子の家に行ってみた。そこでE子の祖母から、E子はS子と一緒に公民館へダンスの練習に行ったと聞いた。公民館へ向かう途中、二人に出くわした。なんと二人とも満面の笑顔で私に手を振って近づいてきた。拍子抜けした私は、どんな養育をしているのか戸惑った。

「どうしたとー？」

「……いや、ちよつと、何かもやもやしとつだけん、あなたたちを探しよつた……。」

「ふーん。そうなんだ。じゃあねー！」

教室とはまったくの逆転状態だった。でも、何はともあれ、笑顔の二人に会えてホッとした。

翌朝、いつものようにS子の日記が出ていた。



ほんの数時間前に教室で見せた姿とはかけ離れた、屈託のない天真爛漫なS子だった。S子の笑顔は、もやもやしていた私を救ってくれた。

その夜S子が書いた日記は、担任としての大きな責任と同時に、もっと真摯に子どもたちと向き合う意欲を奮

今日は、桐原先生にひどいいたいどつちやつてごめんさい。わたしはカスタネットのあと、歌やつたけんつかれて、あんまり声が出せなかつた。そしたら先生におこられていやだつた。だからあのあと、E子と「うちたちの気持ちもわからんくせに、何でもかんでも言わんでよね。」つて話してました。でもわたしがうれしかつたのは、うちに来てくれたことや、わたしが悪いのに「言い方がきつくてごめん。」つて先生が言つてくれたことです。「ありがとう！」

(略) 今日わたしが泣いたのは、本当は、先生が優しく言つてくれたからです。本当はいろんな人に甘えたいけどパパにしかそんな思ひは出せないから……。

(略)

日記には、この後、家庭の事情で一緒に暮らせない父親に対する思ひが延々と綴られていた。

繰り返しになるが、S子の涙の意味を知りたくてS子の家に向かった。物理的にも精神的にも、とにかく近い場所に行く必要性を感じたからだ。そこで出会つたのは、

い立たせてくれた。

新しい教師のみなさんへ

私の頭の中にいくつも浮かぶ「新しい教師のみなさんに伝えたいこと」の中から、限りある紙面に敢えてこの内容を選択した。現在、学校では世代交代が進行中である。私たちも、かつてそうであったように、経験が浅いうちは日々の授業にエネルギーを注ぎながら、慣れない校務に忙殺される。最悪の事態は、そのことよつて授業づくりや学級づくり、そして学校づくりに、子どもが不在になることである。教育や子どもに対して好奇心をもち続け、子どものことをもちと知りたいたいと思ひ続ける教師が、一人でも多くこの世界に生まれてくれることを願つてやまない。

(きりはらけんし 福岡県福岡市立南当仁小学校)



今DOKI子どもたち⑩

子どもたちの回りでは……

桐原 健司

新しい年度が始まると家庭訪問にでかけることになる。教室で出会って、わずか一か月足らずという時期の家庭訪問は、こちらから伝えることより教えてもらうことの方がはるかに多い。また、わずかの間にもほくの中にできてしまっている子どものイメージを崩してくれる機会にもなる。

ユウジは口から生まれてきたかと思っほど思考より先に言葉が出てしまう男の子。宿題や、明日の用意もなかなかできない。当然、授業中も落ち着かない。

四月の中旬、初めてユウジが学校

を休んだ日の夕方、家を訪ねてみた。玄関でぼくを迎えてくれた中学生の兄によると、本人はすっかり元気になり、今、母親と買い物に出かけているという。玄関は散らかっていた。

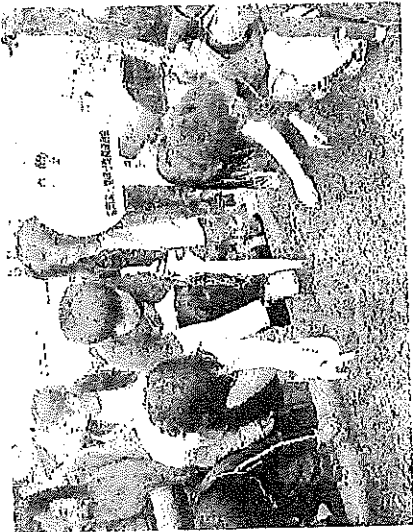
ぼくはその玄関を見て、この子に忘れ物が多い理由が分かった気がした。

「これだけ散らかっている家で生活しているんだったら、忘れ物が多いのもうなずけるなあ。ご両親の手もあまり入っていないんだろう。」と感じて家に帰った。

そして、三週間後の全校一斉の行事としての家庭訪問。対応してくれたのは母親だった。この日は玄関も

部屋も片付いていた。正直言って、この子の保護者には宿題や学校の用意のことを、少々強気で言っておこうと思つての家庭訪問だった。

ところが、



「この子が落ち着かないことも、勉強が不十分なことも分かっています。宿題や忘れ物についても毎日言っています。でも、なかなか変わりません。どう接したらいいのでしょうか。本当に何とかしたいんです。」と切り出した。ぼくの高飛車な思いは一転した。

この子のご両親は結婚が早かったので、まだ年齢的にも若いということもあって、常に学校の先生や近所の保護者などから、「全然子育てがわかっていない」「教えてやろう」というような態度で接せられてきたらしく、そのことが、逆に子どもの悩みをだれにも相談できない(した

くない)状況に追い込む原因になっているということが、話を聞いていくうちにわかってきた。

こんなときは、少々頼りなくても、よく「話しやすい」と言われるフットリとなほくの性格がものをいうのかもしれない。

「親の責任としてやらなければならぬこと、やった方がいいことは、本当に何でもやりたいんです。でも、どうしたらいいのかわからないんです。」

という母親の強い気持ちにうたれたぼくは、家庭学習についてのいくつかのアドバイスと、ぼくと一緒にがんばつていってもらうことを母親と

話して帰った。その日以来、内容的には未熟ながらも二冊の課題ノートが毎日提出される様になった。毎日のページの最後には、お母さんから子どもへのメッセージが、一言書き添えられている。

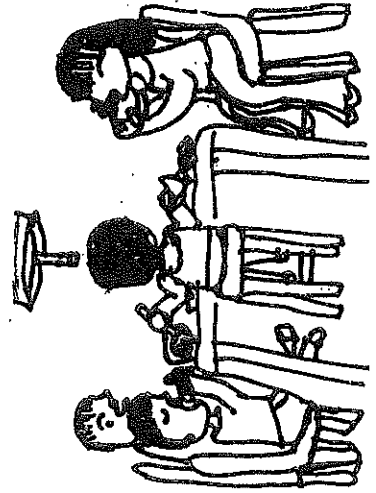
ぼくたちは、子どもの不十分な部分を、子どもの責任にしない代わりに、安易に保護者の責任にしてしまうことがある。少なくともぼくは、二回目の家庭訪問の機会がなければ、玄関先から見た散らかった家の様子だけを見て、親のせいにしていたに違いない。そして、ユウジ本人へのアプローチをあきらめる口実にすらしていたかもしれない。「親

もそうやけんね……」と。

学校だけでなく、家庭に足を運んで、その子の生活に触れるべきであるということは、これまで何度も言ってきた。しかし、それだけでは逆の効果をもたらすこともある。冒頭に述べたように、家庭訪問は、知らなかつたことを知り、持っていた思い込みをひっくり返すような出会い直しの場でもある。

今回は、「今日ドクト保護者」になつてしまつたが、今どきの子どもたちの回りでは、たくさんのおトナたちが泣いたり笑つたりしているのだ。

（もりはらけんし、福匯市立香城南小学校）





今日Doki子どもたち⑩

「その時言えなくてゴメンナサイ」 ～一通の手紙が思い出させてくれたこと～

桐原 健司

昨日、アヤカちゃんが泣いてたよね。棒を投げてアヤカちゃんにあたったのは、エリコのせいです。

その時みんながいっぱい言い出せなかったけど、このままじゃいけないと思ってこの手紙を書きました。本当は直接言ったほうがいいけど、勇気がなく手紙に書きました。その時言えなくてゴメンナサイ。アヤカちゃんには直接言います。

なぜ投げたのかというところを聞いていたからです。その時アヤカちゃんに言おうとしたけど言いにくかったので今日誤りま

一学期も終わりに近づいた、最後の水泳の時間のこと。プールに沈めた輪と棒を取るゲーム中、泣いている女の子に気がついた。

聞いてみれば、誰かが投げた棒が顔に当たっただけ。出血もなく、目にも当たってはいなかったからよかつたものの、ひとつ間違えば大きな事故になっていたかもしれない。実際に、泣いている女の子の様子からすると、相当痛かったはずだ。

早速、全員を水から上げて注意を促した。残念ながら、「自分が投げました」と名乗り出る子はいなかった。あらかじめ、ルールの徹底など、十分な注意をしていなかったば

くにも責任がある。幸い、泣いていた子の顔は腫れたりしてはいなかった。それで、それ以上の深追いはしなかった。

次の日の朝、教室のぼくの机の上に一通の手紙があった。表には、

先生へ
その時 言えなくてゴメンナサイ

と書いてあった。

何のことだろうと思いつつ開いた便箋には、

先生へ

す。
本当にその時言えなくてゴメンナサイ エリコより
返事は漢字ノートに書いてください。

ど、エリコの告白が綴ってあった。ぼくはとても嬉しかった。返事は、こう書いた。

よく言ってくれました。ありがとうございます。
その場では言えなかったことを後で告白するのも、とっても勇気がいることです。本当にありがとうございます。

次はアヤカちゃんに、しっかりと謝らなきゃね。きつと許してくれると思うよ。もう一度勇気を出して！

返事を書きながら、エリコは昨夜どんな気持ちで過ごしたのだろうかと考えた。きつと落ち着かない夜だったに違いない。よほど悩んでこの手紙を書いたのだろうか。

一方、昨夜のぼくは、確かにアヤカのけがの具合は心配していた。しかし、エリコの立場の子どもことは考えもしなかった。

この一学期、教室のゴミ箱が割れていた時、黒板のマグネットがなく

なった時、クラスのボールがなくな
った時、友だちを傷つける心無い落
書きがあった時などなど、直接関係
した人はおろか、心当たりがある人
さえ明らかにならないことが多かつ



た。同じようなことが続くと、さす
がにイライラが募り、ぼくの説教は
追及口調になっていた。「犯人探し
ではなく事実を明らかにするため」
との詭弁を使いつつ、一時的に怒り
を露にしたぼくは、実は、自分が犯
した失敗を名乗り出る勇気さえも子
どもたちから奪ってしまっていたの
かもしれない。

エリコのように、勇気を出して言
える子どもは少数であろうし、ある
意味、早く楽になれるのかもしれな
い。逆に、言わなきゃいけないとわ
かっているのに言いそびれてしまつ
たり、勇気を出せないでモヤモヤし
た気持ちをおひきすったままの子ども

たちの方が多数のはずだ。

仮に被害と加害があるとして、被害
者の側に立つことはもちろん必要な
対応だ。しかし、ぼく達が大切にし
てきた教育の真骨頂は、失敗してし
まった子どもたちの愚に寄り添う
ことだったはずだ。

大切なことを、エリコの手紙が思
い出させてくれた。

(まりはらけん) 福岡市立香峰南小学校

